

## 370 便機失踪事件

平和統一 NEWS No. 68 (2014/5月号)

渡辺 久義

「知らぬが仏」という生き方は賢明か？ 人生においてこれを貫けば、楽であり人からも愛される。しかしこれで我々の本心が満足するだろうか？ そうでなく、すべてを知った上ですべてを許すのでなければならない。これは最も難しい生き方で、人から憎まれるかもしれない。しかしこの最も難しい生き方をあえて選ばなければ、人間の霊的向上はありえない。何か隠されたものがありそうだが、真実を知るのが怖いから、「知らぬが仏」を貫こうというのが、メディアに支配された今の日本人一般の態度のように思える。

そのことを頭においてぜひ読んでいただきたいのは、デイヴィド・ウィルコックのブログ記事「370 便機：〈陰謀団〉の背骨を折る最後のわら？ 1～4」（創造デザイン学会サイト）である。これは彼の『ザ・シンクロシティ・キー』（現在発売中）の続編とも言えるが、この本にないこの記事の特徴は、生々しい証拠による「陰謀団」の悪事が我々の目の前で暴かれることである。リークされたかつての極秘文書の写真版などが豊富に用いられ、読者は度肝を抜かれるだろう。それを含め画像が多いので、かなり長いですが、これはおそらく、息をつがせない推理小説的な迫力があり、かつ恐ろしい読み物である。見ざる聞かざるの幸せを求める人には勧められない。

これは現在、メディアでは謎のまま報道されなくなった、3月8日のマレーシア航空 370 便失踪機が、「陰謀団」にハイジャックされ、3月 25 日ハーグでの、世界 53 国首脳が出席した国際核安全保障会議への攻撃に利用されたようにした可能性がある、という推理を展開するものである。これだけ聞けば、「陰謀論」はいくらでも考えられるという反応が返ってくるだろうが、これは、その推理に至るまでの、歴史上の彼らのやり方の綿密な調査研究の上に成り立っている。彼の議論は、過去のほとんどの歴史的な大事件を引き起こした彼らの一連の計画が——“陰謀論”ではない——陰謀の事実であることの論証であり、370 便事件がそれらにあまりにも似ているとすれば、その延長線上で考えざるを得ないということである。

『ザ・シンクロシティ・キー』を読んでもそう感ずるが、これは我々のこれまでのアメリカ観を変えること要求するものである。これは「アメリカが悪い」という言い方で片づけるべきものでなく（そう言う人たちが増えたが）、「アメリカがあまりにも深く悪の一味に引き込まれた」というべきであろう。ウィルコックはこれを強調し、悪漢もいるが英雄

(政府や軍内部の反対勢力や暗殺を恐れない人々) もいると言い、自浄力の確かさを強調している。ウィルコック自身も一時は暗殺を覚悟した。ただ、これまでの素朴な、自由と民主主義の本家といった見方はできなくなった。

もう一つ分ってきたことは、人命を消耗品と考えるような純粋な悪人がいるということである。そんな者はいないとこれまで我々は考えてきた。しかしそうではなかった。これはマタイ伝 13 章で「毒麦」に喩えられている。いままで「よい麦」との区別がつかなかったのが、収穫の時期になってその特徴がはっきり現れてきた。それが現在、2014 年前後であると考えるとよい。そしてこれは我々が我々の「エゴ」と対決する時期でもある。

国家的陰謀の疑うことのできない証拠物件として広く(現物写真版で)引用されているのは、「ノースウッズ作戦」と呼ばれるケネディ大統領の時の陰謀である。我々はこれを見て目を疑うが、これは最近、極秘扱いを解かれた本物である。これは米陸海空軍の一致した意志としてケネディに提出されたが、彼はこれを拒否した(そしてその翌年、暗殺された)。これは簡単に言えば、アメリカ軍がアメリカ自身を攻撃して、これを敵(当時はキューバ)の仕業にし、世界大戦に持ち込もうという計画である。これを一般に「ニセ旗テロ」(false flag terrorism)と言って、彼らの(一般人の気付かない)伝統的な手段になっている。9.11 テロがそうであり(政府説明を信ずる人は今はほとんどいない)、フランクリン・ルーズベルト大統領が、日本が真珠湾を攻撃すると十分にわかっていながら、わざと無抵抗のまま、日本軍に攻撃させたのもそれである(これは今、多くの人知っている)。またベトナム戦争での「トンキン湾事件」もそれであり、フセインが大量破壊兵器をもっているはずだと言って始めた湾岸戦争でも、それはアメリカがイラク国内に密かに埋めようとしたニセ物だった(これは未遂、チーム全員が“誤射”で死んだ)。

このうち特に民間航空機を使った「騙し」作戦を、事細かに説明している「ノースウッズ文書」を、370 便事件に当てはめると、あまりにも手口がよく似ており、いくつかのメディア報道や、インサイダーのすっぱ抜き記事や、被害者家族の証言とも、すべて辻褃が合うという。これは第 1 部で、第 2 部があるらしいが、やがて現実にもすべてが明らかになると思われる。